

# 弾丸と英雄

ジュービムー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ストリートクーガーという競走馬が実在した世界線のウマ娘3期のお話。  
主人公はディープリンパクト。

# 目次

1. 弾丸と英雄	1
名馬列伝 ストレイトクーガー	5
2. チームスピカ	11
3. チームカノーパス	20
ゲーム版ウマ娘、サポートカード能力値	26
4. 合宿	32
名馬列伝 ウララエクスプレス	36



# 1. 弾丸と英雄

『ディープリンパクトが追い上げる！残り200m！ストレイトクーガーが先頭！しかしここでディープリンパクトが追いついた！ライバル！ディープリンパクトが追いついた！横一線！同時にゴール！どっちだ！勝ったのはどっちだあ！』

【東京優駿・実況】

私、ディープリンパクトが彼女と出会ったのはトレセン学園に入学してすぐのことだった。後ろに撫でつけるような両側に白いメッシュが入り、髪が一房前に垂れている特徴的な髪形と常に身につけている鋭角的な紫色のサングラスは初めて入った教室でも異彩を放っていた。

そしてなぜかいつも私に絡みにくるのだ。

「ヨー、キープ！今日も絶好なレース日和だなあ！」

「ディープです。いかげん名前を間違えるのを直してくれませんか？」

あゝすまんすまん、いつもの適当な謝罪をバツクに私はため息を付く。このウマ娘、ストレイトクーガーは親しい人の名前を常に間違えるのだ。このやりとりももう一度繰り返したかわからない。

頭が悪いのかとも最初は思ったが、座学では常に上位をキープしているのだから始末が悪い。

——そんな友達以下クラスメイト以上の関係が、ライバルに変わったのはいつだったのだろうか。

さんざめく歓声。スタンドには多くの観客が押し寄せ、思い思いのウマ娘を応援している。

東京優駿 日本ダービー

多くのウマ娘が目指し、多くのウマ娘が敗れ去ったレース。

一生で一度だけ挑む事が許されるレースのターフに、私は彼女と共に立つ。

ストレイトクーガーとなぜか一緒に居る事が多かったが、不思議とチームはお互い別の所に入った。

私はスピカに、彼女はカノープスに。

当時は不思議に思わなかったが、今思えばどうして同じチームに入らなかったのだろうかとこんな場所だけでもつい考えてしまう。

『2枠4番、ストレイトクォーター、弥生賞では1着、皐月賞では2着、共にハナ差で決着がついているディープリンパクトのライバル! 3戦目となるこのダービーで2冠を阻むことができるか!?!』

『3枠5番、ディープリンパクト、弥生賞ではストレイトクォーターに負け、皐月賞でリベンジを果たしました! このダービーに勝利し、三冠の栄光を夢見ることができるか!?!』

実況の解説と同時にゲートへの案内が始まる。ゲートに入った私は、ふと左隣の彼女に視線を向ける。彼女もまた同時にこちらを見たのだろうか、視線が交差する。そしてやりやるといつもの自信に満ちた笑みを浮かべる。

「今度は最速で逃げ切る」

「今回も最速で追い抜きます」

私はきつと鋭い目を彼女に向けているのだろう。彼女の目を言葉で、自分と同じ事を考えているのかわかる。

この人だけに負けられない。

勝つのは自分だ。

最初の戦った時の負けた悔しさは、とても深い物だった。次に戦って勝った時の喜びは、言い表せない物だった。

OP戦から負け知らずだと彼女が自慢げに語っていた時、自分の気持ちは誇らしかったような気がする。

私が遅めのOP戦から2連勝した時は、彼女に手が届いた気がした。

ああそうだ、私はこの人に追い付きたいのだ。

皐月賞でのハナ差での勝利ではなく、完全に追い抜いて勝ちたいのだ。

同じチームでライバルと競い合いたいのではないのだ。

もうすぐ全てのウマ娘のゲートインが終わり、レースが始まる。

彼女を追い抜き、最初にゴールするのは私だと自分を鼓舞する。

ゲートが開いた。

## 名馬列伝 ストレイトクーガー

競走馬ストレイトクーガーを語るには、まずその母であるメグロクーガーの父、クーガーエルネスを語る必要がある。

時は1994年。クーガーエルネスはアフリカのケニア共和国で産まれた黒鹿毛の牡馬であり、強靱かつバネのような四肢と伸びとキレのある瞬発力に長けた走りを武器にロング競馬場で重賞を2つ取った競走馬であった。

しかし6回目のレースに出走した際に他馬の転倒に巻き込まれ故障し、競走馬として走る事が不可能となってしまった。元より発展途上国であるケニアで、いくら裕福な馬主と言えど走れなくなった競走馬を養うのは難しい。G1を取った事があれば繁殖馬として生きて行く事もできるだろうが、クーガーエルネスはG1に出走したことすらない。エルネスの命運もこれまでかと思われた矢先、日本から旅行を兼ねた視察に来ていたとある富豪の目に止まることとなる。

無類の競馬好きが高じて競走馬の生産牧場を作ろうとしていた彼はエルネスの走りを見ており、そして故障したことで処分が検討されていることを知るとエルネスの馬主に連絡をとり、エルネスを繁殖馬として購入したいと申し出たのだ。馬主もここまで育て

たエルネスを引き取ってくれるのであるならと快く了承し、クーガーエルネスは日本にやってくる事となった。

1995年、日本の兵庫県に新設された牧場に輸送され、半年の慣らしの後に本格的な繁殖に入った。交配された牝馬の中にはシンボリルドルフの子であるオースミシャインも入っており、オースミシャインとの間に産まれた黒鹿毛の牝馬こそメグロクーガーであった。

競走馬メグロクーガー。98世代の末席に名を連ねた。牝馬にしては大柄な馬体をしており、父譲りの強靱な四肢と伸びとキレのある瞬発力、母の血統譲りのコーナリングの上手さと賢さを併せ持った彼女は逃げよりの先行馬。マイル中距離をメインに出走することとなる。

最終成績11戦5勝

勝ち鞍

G1 天皇賞(秋) 1998年

G2 オールカマー 1998年

G2 大阪杯 1999年

G2 目黒記念 1999年

G3 函館記念 1999年

女性騎手である浅木薫を乗せレースに出走。G1こそ天皇賞(秋)だけではあるが、敗北した時でも常に入賞しつづけた安定性と牡馬に並ぶほどの馬体から戦艦の二つ名がつけられた。

次世代につなげる為の牝馬として望まれた為、そこまで多くのレースに出走することはなかった。1999年の冬に引退し繁殖牝馬となる。

ちなみにサンデーサイレンス産駒が軒を連ねる中、全くの無名と言えるクーガーエルネス産駒がここまでの成績を残した事でクーガーエルネスへの種付け依頼が徐々に増えて行くこととなる。代表的な姉弟馬としてはアマゾネスクーガー(母馬ヒシアマゾン)、メジロピューマ(母馬メジロドーベル)などが有名。

2002年、メグロクーガーから一頭の栗毛の牡馬が産まれた。その馬こそストレイトクーガー。ディープリンパクトと壮絶な戦いを繰り広げる事となる馬である。

名前の元ネタは某アニメであると思われるが、馬主となった富豪の息子は某アニメを知らず、単に速そうだからという理由でストレイトクーガーと名付けた。

なお余談ではあるが、ウマ娘化に際しどうしても某アニメのキャラクターに近い姿にしたいとストレイトクーガーのデザインを担当したイラストレーターが熱望し、某アニメの制作会社や監督やキャラクターデザイナーを担当した人などにイラストレーター自

らが頭を下げに行つて許可を得たと言う伝説がある。

父はライデンホース、父の父はメジロデュレンであった。メジロ系列とシンボリ系列の血統は浪漫が過ぎると笑われた。しかし枯れた血とも称されるシンボリドルフとメジロデュレンの血統は、エルネスクーガーの血が交わることで復活を果たした。

最終成績15戦9勝

勝ち鞍

G1 朝日杯FS 2004年

G1 東京優駿 2005年

G1 凱旋門賞 2006年

G1 有馬記念 2006年

G2 弥生賞 2005年

G2 神戸新聞杯 2005年

G3 小倉2歳S 2004年

ディープリンパクトと張り合うように出走し、常にハナ差で勝負が決まったこともあつてディープリンパクトと共に、2004年から2006年ごろまでの第3次競馬ブームの立役者となる。

しなやかかつ強靱でバネのような四肢とコーナリングの上手さと賢さを持つ母の血

統と、長距離を走り切る脅威的な心肺機能と気の強さを持つ父の血統。それらを完全に受け継いだストレイトクーガーは、囲まれる事を嫌う性質と父の血統譲りの負けん気の強さも相まって、常に前へ前へ行こうとする気質を持っていた。特に並ばれるとより前に行こうとするので、トウカイテイオーのような乗り心地の良さとは裏腹に非常に制御が難しい競走馬となっていた。

それゆえレース展開は常に大逃げとなり、ディープリンパクトの苦手とするレースを強いていた。ハナ差での決着も、どちらのスタミナが持つかの勝負であるからと言われた。またストレイトクーガーはレースの距離を把握して走っていたとも言われており、実際距離にに応じてスタミナの消費をこまめに調節していた節がある。

ゲートを怖がるそぶりは最初からなく、スツとゲートに入って開く瞬間まで身動きせず待っていた。そして開いた瞬間、拳銃が発砲されたように飛び出していくことから弾丸の異名を持つこととなる。

この弾丸スタートこそストレイトクーガーの本領とも言われ、どの位置からスタートしても必ずハナを取っていた。出遅れはゲート訓練を兼ねた訓練の時の一回だけだった。

ストレイトクーガーが活躍すると共に、競馬ファンからはサンデーサイレンスの血統が幅を利かせる現代の競馬においてクーガーエルネスの血統は古くから日本に受け継

がれた競走馬の反抗の証と見られるようになっていった。実際、のちに古くから続く日本産競走馬の血統を多く受け継いだ馬が多く産まれており、クーガーエルネス産駒からはクロスクーガー（母馬ダンツシリウス）やメジロピューマ、ストレイトクーガーの兄弟としてボウシクーガー（父馬オグリキャップ）、ワンワンクーガー（父馬イナリワン）が活躍した。

なおサンデーサイレンスの血統も取り入れようとしたが、この時期では不受胎が驚異の9割を記録。産まれてきた数少ない馬も全てが競走馬として適さなかったり、早く走ることができなかつた。このことから競馬ファンからはサンデーサイレンスの血統を拒む呪いがかかっていると噂された。

後にストレイトクーガーの子とデーブインパクトの子が無事に交配に成功し、現在育成されている。

## 2. チームスピカ

『2005年、東京優駿

最も幸運な馬が勝つ。日本ダービーではそう謳われる。この2頭を除いて。

最速の大逃げ馬、【弾丸】ストレイトクーガー

最速の追い込み馬 【英雄】デュープインパクト

どちらか1頭だけならば、見る人はきつと退屈しただろう。

この2頭が揃っていたから、私たちは熱くなれた。

次の伝説を見よ。』

【THE WINNER CMシリーズより】

ダツ、ダツ、ダツと自分がターフを挟む音が聞こえる。

その音と共に一歩、また一歩、彼女の青と白の勝負服が近づいてくる。すでに最終コーナーに入っている。

弥生賞からずっとうさだ。彼女の背を追いかけ続けていた。弥生賞では並ぶことで

精いっぱいだった。臯月賞では半歩競り勝てた。ダービーでは自分の背を見せると意気込んでいた。

しかしその背が近づく時があまりに遅く感じた。ダービーは臯月賞より400m長いとは言っても、それと比較しても既に並んでいてもおかしくない。時間は無いと言っても、この2カ月を訓練に費やしてたのだ。仕上がりは臯月賞の比ではない。だとしたら――

(彼女はもつと早くなっている……！)

思わずギリイと歯ぎしりをしてしまう。臯月賞で感じた手ごたえは、空虚な願望に過ぎなかつたというのか。すでに最後の直線に入っている。時間切れだ。あの背を追い抜き、こちらの背を見せるといふ願いは届かないのだ。

ならばせめて

「勝つんだ……ッ」

疲れ果てた脚に力を入れる。必死に脚を廻し、地を蹴り前へ前へ。

最後の50mでやつと並ぶ、あと少しだと最後の力を振り絞る。もはや背を見せる願いやなど遠くに置き忘れていた。ゴール板が過ぎ去ろうとしている。なけなしの気力で地を蹴り飛ぶ。その一瞬だけ自分が走る理由を忘却した。

『ストレイトクーガーとディープリンパクト、横並びでゴールイン！こちらからはどち

らか先かはわかりません！写真で判定が下されます！」

疲れ果てた体に力はい入らず、慣性に従って50mほど進んだ所でようやく歩くほどの速さに減速した。隣で競っていた彼女も、自分より少し前でゼイゼイと肩で息をしながらゆつくりとこちらのの、掲示板の方へ振り向く。私もそうだ結果は、と思いだし掲示板へ振り向く。

『ハナ差でストレイトクーガー！ストレイトクーガー1着です！』

そこに灯っていた数字は自分ではなく、彼女のものであった。

足元が崩れ落ちるような感覚と共に視界は黒く染まり——

「…夢、またですか」

私は自室のベットの上で眼を覚ました。外は未だ薄暗い朝の4時頃。未だ夏に入っていない6月なのに汗で枕が濡れているのが気持ち悪い。日本ダービーが過ぎ去って既に1週間が経つと言うのに、ここの所眠ってもあの夢しか見ていない。

無理に寝ようとしても寝付けないのは分かっているので、私は汗でぬれたパジャマからジャージに着替える。水を飲み、同居人のハーツクライを起こさないように音を立てずに寮の外へ出た。

星空は見え、雲に覆われたどんよりとした空を見上げ深呼吸する。ひんやりとした

湿気を含んだ空気を感じ、そしてわたしは走りだした。

「はっ、はっ、はっ、はっ」

いつものジョギングルートを無心で走り続ける。あの夢を見始めてから毎朝行うようになったジョギング。疲れるくらい走らないと、気分は沈んだままになりそうだと思いはじめたことだ。約1時間のコース、その道程の半分ほど行つた所で軽い休憩をはさむ。

川岸の堤防の上に備え付けられたベンチに座り、日の出で赤く染まる川を眺める。ここでも何かを考えるとという事はしない。あのダービーの事しか考えられなくなるのだから。

「ひゃっー！」

突然、頬に冷たい物が当てられる。驚いた私が振り向くと、そこにはチームの先輩であるトウカイテイオー先輩がジャージ姿で缶のスポーツドリンクを持って立っていた。

人懐っこい笑みでスポーツドリンクを手渡してくると、先輩は私の隣に座ってきた。

「こんな時間から頑張ってるね！」

「いえ、まあ、はい」

「僕も日の出から走ってるけど、それより早いでしょ？」

「そ、そうですね、大体4時頃から…」

「4時からかー」

そういつたやりとりをすると、先輩の笑みが優しいものになった。

「もしかして眠れない?」

ドキツとした。元々9時頃にはベットに入るので睡眠不足にはなっていないのになぜわかつたのだらうか。

「ダービーの前までジョギングは休日の朝しかやってなかったのに、終わった後、急に走るようになったらわかるよ」

私は手に持つドリリンクに視線を落とす。心配かけさせたくなかったのに…。

「ねえディープ、何に悩んでるか話してよ。君が迷惑をかけたかなくて、何事も一人でやろうとしちゃうのはわかるけど、僕たちは同じチームなんだよ。君が苦しんでるの、見たくないよ」

少しの躊躇の後、ポツリポツリと私は話し始めた。ストレイトクーガーとの関係、臍月賞で勝った後の慢心、ダービーでの敗北、その悪夢。先輩は私が話してる間は何も言わず、私の話を聞いてくれた。

「これは受け売りなんだけど、ディープはこんな言葉知ってる? 『兎は亀を見ていた。亀はゴールを見ていた』っていうの」

「…いえ、知らないです」

「レースにおける心構えだよ。亀だけを見ていたら、亀を追い越す事しか考えなくてペースが乱れる。ただ亀のように自分のレースをして、ゴールを目指せばいいのだから」

僕も兎だった、と先輩はポツリと零した。

「天皇賞・春、マックイーンに負けたの知ってるでしょ？その時の僕は兎だったんだ」  
懐かしがるように、だけどどこか楽しげに眼を細めた先輩に私はなぜか驚いてしま

う。  
「負けた…のなら、悔しいのではなかったのですか？」

「悔しかったよ」

先輩は即答した。

「無敗が途切れた訳だし、とつても悔しかったよ。でもね。マックイーンは僕の目標になつてくれたんだ」

「目標…ですか」

「そう、僕が何度骨折しても、何度立ち止まっても、絶対に勝ちたいって思える相手。走り続けられる理由。だから、奇跡を起こしたんだ」

奇跡、先輩が起こした有馬での大復活。それを見てマックイーン先輩も諦めずに復帰を目指したのはあまりに有名な話だった。

「ディープも、ストレイトを相手に勝ちたいって思ったから練習、頑張ってたと思うんだ。だけど僕たちをもっと頼ってよ。僕たちは一人じゃ強くなれない。勝ちたいと思える人、ライバルがいて、自分を支えてくれるトレーナーがいて、一緒に練習してくれる仲間がいて、初めて強くなれるんだ」

「でも…私は…」

「みんなに迷惑かけちゃうから？ 迷惑ならゴルシが一番かけてるじゃん。特にマックイーンに。そんなことよりも自分がどうしたいかだよ」

ずいっと先輩が顔を突き出してそう聞いてくる。

自分がどうしたいか、思えばあまり考えなかった。

ストレイトに勝ちたいから。それもあある。

ストレイトに背を見せたいから。それも目標だった。

だけど、ああ、そうだ。私は、ストレイトに見てほしいんだ。

ストレイトはいつも真つ直ぐ前を見続ける。そこに私が居たいんだ。

だから――

「私は…私はストレイトに勝ちたい。あいつが勝ちたいって思える相手になりたい！」

「そっか！ そうだってみんな！」

とトウカイテオーは背後に振り向く。釣られて私も振り向いた先にはチームスピカ

全員がいた。

「テイオーの言うとおりに、わたくし達をもっと頼りなさい」

優しい眼を向けるメジロマックイーン先輩

「いよーし！なら今度一緒にカジキマグロ釣りにいこうぜー！」

と謎の提案をしてくるゴールドシップ先輩。

「いやなんでそうなるのよー！」

ゴールドシップの提案に突っ込みを入れるダイワスカーレット先輩。

「よっしゃー！オレも練習手伝ってやるー！」

そう意気込むウオッカ先輩。

「私も一緒に走ってあげる、ね？」

優しくほほ笑むサイレンススズカ先輩。

「みんな一緒に頑張ろうねー！」

元気に拳を突き上げるスペシャルウィーク先輩。

「盗み聞きしていたのはすまなかつた。だけどディープリンパクトはチームとの間に壁があったから、こうでもしないと悩みを聞き出せないと思ってな」

トウカイテイオーに頼んだのだと説明し、謝罪する私たちスピカのトレーナーさん。

「みなさん……」

「ストレイトクローガーへのリベンジ、俺たちチームスピカが全力で応援してやる。だから俺たちをもっともつと頼ってくれ」

「…はい！改めて、これからよろしくおねがいます！」

「よし！じゃあみんな集まれ！」

その掛け声とともに先輩たちは円になり、中央に手を置きあう。私もおずおずと円に加わり、中央の重ねられた手の一番上に自分の手を置く。

「打倒！ストレイトクローガー目指して！頑張るぞ！」

エイ！エイ！オー！の掛け声が当たりに響き渡った。

### 3. チームカノーパス

『ぼくはサイレンススズカのような馬にもう一度出会いたくてジョッキーを続けていました。』

ストレイトクーガーはまさにスズカの生まれ変わりのようなもので、取れたのなら全力で屋根を取りに行っていました。昔のぼくが乗ってましたから、泣く泣く断念しましたけどね』

『ディープリンパクトは物凄い馬で、きっとストレイトがいなかったら無敗で三冠を取っていたと思います。メグロといい、ストレイトといい、私は伝説になる競走馬と走れてとても光栄でした』

【競馬新聞 ディープリンパクト、ストレイトクーガー引退特別号

過去と今、伝説の騎手の対談より対談の一部を引用】

「あと3周、いくわね」

「はい！」

チームスピカ全体がディープリンパクトの特訓に力を入れるようになって3日が経った。特訓の為に貸し切られた練習用ターフでディープリンパクトはサイレンススズカと併走していた。

ストレイトクーガーと同じ逃げを得意とするスズカとの訓練はディープにこれまでに以上の経験を積み上げる事ができる。この3日間はどうしてスズカと併走しているのか、いつもの走りとは全く違うペース配分で走っている。それ故額に汗を浮かべ、顔にも辛さがにじみ出ている。しかし弱音は決して吐かない。全てはライバル、ストレイトクーガーに勝つためだ。

その練習用ターフを見下ろせる校舎の屋上から、双眼鏡を使い覗き見る人影があった。

メガネをかけた人影は双眼鏡から眼をはなすと、後ろの壁に背を付け読書をしている。もう一つの人影に話しかけた。

「ディープリンパクトは、ダービーの敗北の動揺から完全に抜け出したようです。思ったより早く抜け出してしまいましたね。」

「ノンノンノンスウロオリイだよ遅すぎる。キープなら1日で立ち直ると思っていたんだから」

「彼女はダービーでの勝利を確信していましたから、そこから1日で立ち直るのは不可

能ですよ。あなたとターボとハルウラくらいですよ。負けても動揺が極端に短い  
は」

「勝ち負けに気を取られて無駄な時間を過ごすなんて時間の無駄使いでしょう。それよりも敗因を最速で把握し最速で修正して訓練に取り入れる方がよっぽど有意義だ。そうでしょう？ ヤクノ先輩」

そう言いながら彼女、ストレイトクーガーは本を閉じて校舎内に向かう。双眼鏡を持つウマ娘、イクノデイクタスもイクノですと彼女の発言を訂正し、彼女に続いて校舎へ入る。向かう先はチームカノーパスの部室だ。

「これから一気にデイーブは伸びて行きますよ。スズカとの併走もそうですが、他のメンバーの支援はとても強い」

「伸びてもらわなくちゃ困る。私と肩を並べるのは彼女だけだからね」

「いつも思うんですが、ストレイトはデイーブの事をやけに押してきますね。」

「当たり前さ。私は彼女に惚れているんだから」

その言葉にイクノデイクタスは思わず立ち止まってしまふ。顔は少し赤い。

「ほ、惚れているとは…」

「言葉のとおりさ、負けても膝を折つても、それでも自分に向かつて全力で我武者羅に追いかけてくる彼女に私はぞっこんなのさ。強い人だ。惚れがいがある」

だからこそ、とストレイトクーガーは立ち止り、イクノデイクタスの方に振り向きながら続けてこう言った。

「私は最速で逃げ続ける。彼女が追いかけて続ける理由<sup>最速</sup>でありたいから」

にやり、いつもの自信に充ち溢れた笑みを浮かべ、また歩き出す。イクノデイクタスもハツとして後を追った。

彼女たちが向かうチームカノープスの部室。そこではすでにチームメイトの3人とトレーナーが揃っている。

「スピカの偵察<sup>ご</sup>くろろ」

カノープスのキャプテンであるナイスネイチャは部室に入ってきた2人をねぎらう。

「遅いよクーガー！今日こそはターボがクーガに勝つんだから早くターフに行こー！」

クーガーの手を引いてカノープスに割り当てられた練習用ターフに行く事を催促するツインターボ。

「ターボ、まだターフの整備が終わる時間じゃないから走れないよー！」

そうターボを止めるのはマチカネタンホイザ。

「それに今から来月末から行われる合宿の説明がありますので、もう少しここに残ってくださいね」

そう言って手に持つ合宿のしおりを机の上に並べるのはカノーパスを率いる南坂トレーナーだ。

ターボは渋々といった風にクーガーの手を放して椅子に向かう。イクノディクタスとストレイトクーガーも空いている席に座ると、南坂トレーナーが合宿の説明を始める。

「えー来月末から始まる合宿ですが、ストレイトクーガーの強化をメインに進めたいと思っています。具体的なスケジュールは各自しおりを読みこんでみてください。では大まかな流れを説明します。」

そう前置きし、合宿で行う訓練の内容を大まかに説明していく。やがて説明が終わり、何か質問はありますかと南坂トレーナーが聞くとイクノディクタスが手を挙げた。

「合宿から菊花賞トライアルの神戸新聞杯までにストレイトがレースに出る予定や要望などはありますか？ 場合によっては合宿の訓練も軽くする必要があると思いますが」

「いえ、神戸新聞杯までにレースに出走する予定は組んでおりませんし、ストレイトからもそういった要望は出ておりません」

そう南坂トレーナーは返答し、ストレイトクーガーをちらりと見る。クーガーもいつもの笑みを浮かべながら軽く頷く。

「わかりました。ではこちらから提案したいのですが、もう少し訓練内容を重くしては

どうでしょうか。ディープリンパクトの特訓を見る限り、かなり力を付けて菊花賞に望んでくると思われます。」

「やーでも今の合宿内容も結構キツイよ？ディープが力を付けてるからって焦って無茶な訓練しても意味がないとネイチャさんは思うんですよ」

イクノディクタスの提案に反論するナイスネイチャ。マチカネタンホイザもそれに賛同するように頷いている。

「そうですね……こればかりは本人の意思を尊重しようと思うのですが、ストレイトクーパーはどう思いますか？」

そう南坂トレーナーはストレイトクーパーに問いかける。

「んー、私はこう思っているんです。無茶な訓練で負傷するリスクとより速くなるリターン。それらは結局は運が絡んでおりリスクとリターンがつり合っているかで人は選択する。だけど今はそんなことはどうでもいい重要な事じゃない。必要なのはただ一つ最速でより強くなることでそれ以外の事は些事なんですよ。」

私はより早くなる事を望む。ストレイトクーパーはそう言った。

## ゲーム版ウマ娘、サポートカード能力値

## 育成ウマ娘

【速さが足りない！】ストレイトクーガー ☆3

初期能力値 スピード：105 スタミナ：89 パワー：67 根性：89 賢さ：  
100

バ場適正 芝：A ダート：G

距離適性 短距離：C マイル：A 中距離：A 長距離：B

脚質適正 逃げ：A 先行：C 差し：G 追い込み：G

成長率：スピード30%

固有スキル：ラディカル・グッド・スピード Lv1〜5

スタートで出遅れない時に先頭に居続ける力を（すこしくすこく）出す。

所持スキル：集中力 逃げのコツ○ 急ぎ足 先駆け（覚醒Lv2）ハヤテ一文字（覚醒Lv3）

直線回復（覚醒Lv4） 全身全霊（覚醒Lv5）

育成イベント

『君に足りない物』

『間違えるな!』

『文化的な日』

サポートカード

SSR

タイプ：スタミナ

【次世代に繋ぐ】メグロクーガー Lv1/30

固有ボーナス：次世代に繋ぐ

初期スタミナ値アップとレースボーナス

サポート効果

トレーニング効果 10%

レースボーナス 3%

友情ボーナス Lv5解放

ファン数ボーナス Lv15解放

得意率アップ Lv35解放

スキルPTボーナス Lv45解放

所持スキル

スキルはありません

育成イベント

母の愛（レア：好転一息 ノーマル：直線回復）

子の幸せ

託す思い（ノーマル：コーナー回復）

覚えていますか？

手を合わせて

愛おしき人へ

エピソード

愛おしき人よ。

あなたは無茶ばかりして私を心配させるけども、きっとそれがあなたの幸福なのでしよう。

ただどこれだけは祈らせてください。

どうか怪我をしませんように。

どうか病気になりませんように。

どうか末永く、幸福が続きますように。

これだけが母の願いです。  
どうか、どうか、この願いが叶いますように――

SSR

タイプ：スピード

【フォトンブリッツ】ストレイトクーガー Lv1/30

固有ボーナス：フォトンブリッツ

初期スピードアップとやる気効果アップ

サポート効果

トレニング効果 5%

レースボーナス 5%

友情ボーナス Lv5解放

ヒント発生率 Lv15解放

ヒントLvアップ Lv35解放

スピードボーナス Lv45解放

所持スキル

集中力

直線加速

直線回復

先駆け

リードキープ

逃げのコツ○

育成イベント

速さが足りない！（レア：ハヤテ一文字 ノーマル：直線巧者）

速さを一点に集中！

速さこそ文化の基本法則！（ノーマル：一匹狼）

速さは力です！

酸素をください。

エピソード

【弾丸】

ウマ娘に名付けられるにはあまりにその異名は異質であった。

しかし一度でもレースを見ればその異名こそそのウマ娘を一言で表すものだと理解できる。

ゲートを銃口に見立て、ゴール／目標へ目掛けて放たれる弾丸。

追いつける者はいない…はずだった。

「あいつただけだ、私に追いつけるのはあいつだけだ」

——だからこそ最速であり続ける。

## 4. 合宿

『ウラスト配合は浪漫しかないんよ』

しかも産まれてきた3頭が3頭とも個性しかないのは奇跡なんよ』

〔2ch競馬掲示板名馬を語るスレにて〕

8月。チームスピカは合宿の為、海辺の旅館に来ていた。初日は軽い練習を行い、二日目に毎年恒例となっているトライアスロンを行うのだ。

今は初日の練習を終え、旅館の温泉に入っている。

「こういった旅館にお泊まりをするの、私初めてですね」

そう、ディープリンパクトは湯船につき、顔を手ぬぐいでぬぐいながらそう言う。隣にいるトウカイテイオーが答える。

「へー、あまり旅館に泊まった事ないんだ」

「ええ、幼い頃は体が弱かったので、旅行に行く事がなかったんです」

合宿ですけどなんだか楽しいです、とディープリンパクトは笑う。

「じゃあいっぱい遊ばなきゃね！みんなでウノしよう！」

賛成！とチーム全員が手を挙げ、その後ランプで大富豪しよういやブラックジャックだと部屋で遊ぶ話で盛り上がる。

楽しいなどディーパックトは心から思った。

温泉から上がり、わいわいと廊下を歩いていた時だった。

「でいつ！ディーパックトさん!？」

そんな叫び声が後ろから上がり、みんなが振り向くと小学生ほどの一人のウマ娘がこちらを指さして立っていた。

「あの、あなたは……？」

「あ！お！おれ！臆月賞でディーパックトさんの走りを見て憧れたんです！出会えてすっごく嬉しいです！」

そのウマ娘は小走りで近づいて、握手してください！と手を差し出してくる。ディーパックトはおずおずとその手を握る。

「うわあ……うわあ……！」

「あ、えつと……」

「あー、きみ、きみのお名前は？」

苦笑を浮かべているトウカイテイオーにそう尋ねられると、感激して眼をキラキラ輝かせていたウマ娘はしまったと顔色を変え、手を放して名のる。

「ごーごめんなさい！おれはウララエクスプレスって言います！」

謝罪するウマ娘、ウララエクスプレスは本当にごめんなさい！と腰を深く曲げておじぎをする。

「ウララエクスプレスちゃん、ね？大丈夫、怒ってないから、ね？」

「えっ、でも、迷惑かけちゃって…」

「少し戸惑っただけだから、迷惑だなんて思ってないよ。私のファンなんだし、嬉しいよ」

あ、ありがとうございます！とウララエクスプレスは顔を上げて笑顔を浮かべる。

「ディープリンパクトさんはどうしてここに…？」

少し不思議そうな顔をしてウララエクスプレスは尋ねる。

「ディープでいいよ。私たちはチームの合宿に来てるの、あなたは？」

「おれは毎年ここのお手伝いに来てるんです。まさかデイ、ディープさんに出会えるなんて思っただけじゃなかったけど…」

「そうなんだ、お仕事お疲れ様」

「ありがとうございます！あ、そろそろ戻らないと…」

「そっか、頑張つてね」

そうデイーブインパクトが言つて、部屋に行こうとする。

「あの、最後に一ついいですか?」

「なにかな?」

「おれ! デイーブさんみたいなすごく強いウマ娘になります! だから! 名前、覚えていてくれますか?」

デイーブインパクトは見た。ウララエクスプレスの不安げな瞳、しかしその奥には小学生とは思えないほど強い力があつたのを。

「——もちろんだよ。きつと君は私に負けないほど強いウマ娘になる」

ありがとうございませう! と大きくお礼を言つて、ウララエクスプレスはかけだして廊下の向こうへ消えて行つた。

トウカイテオーは優しいまなざしを彼女が消えて行つた廊下へ向けながら、デイーブインパクトに声をかける。

「僕もあの子は強いウマ娘になると思うよ」

「はー」

私のようなつよいウマ娘になると言われた。

頑張ろう、私を憧れてくれたウララエクスプレスのその眼差しに答えられるように。

## 名馬列伝 ウララエクスプレス

ウララエクスプレス 牡馬

父馬・ストレイトクーガー

母馬・ハルウララ

事のきっかけはハルウララが競走馬から引退した後、周囲の身勝手なエゴに振り回され続ける事に義憤の念を抱いたストレイトクーガーの馬主が衝動的にその財力でハルウララを買い取った事から始まる。

最弱の競走馬とはいえ繁殖能力のある牝馬、血筋だけは残してやろうと2008年にストレイトクーガーと交配させた。翌年、無事に出産すると予想以上にその子は競走馬としての素養を持つていた事に気がつく。

馬体は母馬に似て小柄ではあったが、とても丈夫でスタミナも豊富。父馬の負けん気の強さと母馬の凶太さを併せ持ったがおおよそ穏やかな性格。そして群を抜く頭の良さを見せた。

何事も3回こなせばおおよそのコツを掴み、4回目5回目で完全にモノにするほどで、ゲート訓練時に30分間ずっとゲート内に居ても暴れる事がなかった。

やがて子馬は馬主の友人で、高知に住む男性に買われることとなった。その男性はハルウララのファンであり、ウララに子ができたと知ると出産もまだなのに馬主に連絡を取ったほどだった。

男性はウララがいた高知競馬場に子馬を託す事を選び、その馬にウララエクスプレスと名付けた。

最終成績37戦23勝（地方での最終成績は15戦13勝）

勝ち鞍

G1 天皇賞・秋 2014年・2015年

G1 大阪杯 2015年・2016年

G1 ジャパンカップ 2013年・2015年

G1 マイルCS 2016年・2017年

G2 日経賞 2014年

G2 中山金杯 2014年

2013年まで高知競馬場に所属しており、そこでは無類の強さを発揮し2014年から中央に移籍した、皇帝の壁であるG1 7勝を乗り越え8勝を記録した記録的な名馬である。中央在籍時でのあだ名は2連覇特急

2014年の宝塚記念でゴールドシップと激しい競り合いを行うも2着で終わる。

ちなみに気性の荒い事で有名なゴールドシップだが、ウララエクスプレスと眼が合った瞬間動き止め、まるで昔からの友人のような仲の良さをみせた。

天皇賞・秋はそれぞれ父のライバルであったジエンティルドンナとの対決が大々的に宣伝された。最終的にウララエクスプレスが勝利したがジエンティルドンナとウララエクスプレスそれぞれの強さから、デューピンパクトとストレイトクローガーが出会わなかったらおそらくこうなっていた実例と言われた。

2017年の天皇賞・秋を最後に引退し種牡馬となる。その際の検査で全く故障がない事が確認されており、ゴールドシップと並んで現役時代に手を抜いていた疑惑のある馬と称されることとなる。